



現実を越 えた夢

川崎ゆきお

「昨日はリアルな夢を見ましたよ」

「ほう、夢の話ですか。いくらリアルでも夢は夢でしょ。現実じゃない」

「ああ、確かにそうですが、こんな現実もあったかもしれないと思うんです。うちの兄の話なのでですがね、何か就職活動をしていたらしいんですよ。時代的には三十代でしょうか。しかし、兄はずっと同じ会社に勤めていましたねえ。定年までずっと同じ。転職などしたことがありません。だから、就職活動なんて、現実にはない。でも夢の中ではリアルにそれが再現されいるんですよね。兄が家の者に、就職先が決まりそうだと言っているのを、僕は横で聞いているんです。夢の中での僕ですよ。だから、その僕は、ごく当たり前のようにして、それを聞いている。本当の兄は就職活動などする必要がなかったし、今は悠々自適に暮らしていますよ」

「それで」

「実は兄は合格したらしいんですけど、実際には臨時社員として採用されたようです。それでも一応明日から通える会社ができたわけですから、まあ、誰も文句は言いませんよ。それにしっかりと働けば、いずれ正社員になれるとか言ってました」

「それだけの話ですか」

「ところが、僕はその会社の社長、実質的なオーナーですがね、個人的に知り合いなんです。だから、平気で大きな本社ビルの社長室へ出入りできるんです。実際に何度か呼ばれて行きしたよ。これは趣味を通じての知り合いでしてね。だから、社長に兄のことを頼めば一発で臨時社員じゃなく、正社員にしてもらえるかもしれません」

「そこはリアリティーがありませんねえ」

「そうですか」

「現実よりもリアルな夢だと言ってませんでした？」

「言いました」

「しかし、あなた、そんな地位じゃないし、趣味って何ですか。釣りバカ日記のような釣仲間ですか」

「川です」

「川釣り？」

「いや、川柳の仲間なんです」

「ほう」

「だから、僕の中ではリアルなんです。現実にあり得ることです」

「しかし、そんな会社の偉いさんと川柳を通じて知り合えたのですか」

「いいえ」

「そうでしょう」

「ああ、それに僕は川柳なんてやってませんから、そんな仲間もいません」

「ほらごらんなさい。まったくあり得ない現実離れした設定じゃないですか」

「そうなんですが、夢の中では僕、川柳の達人になっていました」

「川柳に達人はないでしょう」

「ああ、そうなんですか。じゃ、名人です」

「どちらにしても、あなたの川柳とかのセンスもないし、現実の上で、川柳と関わることもないでしょう」

「サラリーマン川柳なら知っていますよ」

「作りましたか」

「いいえ」

「だから、リアリティーがないというのです」

「やはり、夢は夢ですか。現実にはない突拍子もない話になって」

「だから、人の夢の話など、まともに聞くような人は滅多にいませんよ」

「しかし、夢の中では、何処を捕まえても、全部本物なんです。ごく当たり前のように」

「それで、その夢の結末はどうなりました」

「忘れました」

「忘れた」

「目が覚めたので、何処で終わったのか分かりませんし、そして何処が最後のシーンなのか、分かりません」

「つまり、夢の話であったとしても、その話の落ちとか、結末とか、そういうものもない夢の話なのですね」

「ただ、兄が就職活動をやっている姿が、非常に新鮮でした。現実にはないシーンです。それにそんなこと、想像したことありません。でも就職したときのことは覚えていますよ。たった一度だけの入社試験で、合格しました。きっとその頃のイメージと重なったのでしょうか」

「知らん。そんな細かい事情は」

「あ、はい」

「だから、他人の夢の話など、最初から聞きたくなかったんだ」

「ああ、すみません」

了